

長屋王事件小考 — 自尽とその背景 —

高 重 進

Essay on Prince Nagaya's Case —With regard to his suicide and its background—

SUSUMU Takashige

Abstract

Prince Nagaya, aged 46, suicided at his residence with his wife and his three sons all together on 12th Feb. 729 A.D.

This reatise aims to make clear how to committed the suicide and its background of the criminal case, mainly in the religions point of view.

The text "Syokunihongi" was written about the suicide that prince Nagaya made to suicide himself for the reason why he laid a cruse on the Emperor. Thereby almost all of the authors had asserted that Emperor Syomu suggested to suicide himself, but I should take with issue them on the suicide: Emperor ordered him to be suicide himself. The reasons are that, (1) Emperor is a "thinking-doing" Emperor. (2) There are many elements of background. Then inherent religion, Shinto and acquired religion. Buddhism was fiercely competing with each other in the society of ancient Japan. The head of the former was Prince Nagaya and the latter Emperor Shyomu. The other element is dispensation thought on based on the confucians as well as astrology. These thoughts and knowledges influenced on the both sides, wherever dicision-making had been done. We should be remarkable that bad omen as Mars and Venus appeared in 720-729 A.D. concentrated, and 12th Feb. 729 A.D. the case occurred.

キーワード…長屋王、聖武天皇、自尽、鷹飼禁止令、復姓、賀茂祭、火葬と土葬、朝廷誹謗事件、諸寺併合令、天命思想、

祈願の神仏住み分け、一念直行の天皇、元興寺法会事件、在来宗教、渡来宗教、

はじめに

長屋王の変に関する研究結果の要点は極めて簡潔に新日本古典文学大系『続日本紀』の補注「長屋王事件」にまとめられている。^(一)

これによると、天平元年（七二九）二月十日条に長屋王謀反の密告があり、同日夜の三関固守及び長屋王宅包囲をなし、一日に窮問が行われ、一二日王と室吉備内親王及び四人の男が自経、一三日王及び室の葬儀の勅が出された。この背景となる事情については次のように述べられている。後の記述との関係もあるの

で、そのまま引用することにする。即ち、「長屋王は持統朝に皇太子に準ずる処遇をうけた「後皇子尊」すなわち、高市皇子の長子である。この王は、和銅五年に故文武のために書写させた大般若経の願文に、「長屋殿下」と記されている。殿下は臣下が三后（太皇太后、皇太后、皇后）および皇太子に上啓めるときに用いられる称号である。（儀制令3）。かつまた、霊龜元年二月には王の室吉備内親王所生の男女は皇孫の例に入るとの勅が出されている。とすれば、父の長屋王は、これによって天皇の子としての処遇をうけることになったとも解せられる。したがって以上の事柄

を勘案すれば、木簡の中に「長屋親王」と記されていることが発掘されたこともあって王家の内部での私称ではなく、天皇家一族によって承認された称呼であったとみてよいのではないか。そのような状況のなかで生じたのが皇太子の夭逝であって、それにより長屋王は有力な皇位継承候補者に浮上した可能性がある。それがこの事件のいま一つの背景であった。」とみている。（一）内は筆者注）

細部にわたっては、長屋王邸及びその周辺の未整理の出土木簡のからみを除いても枚挙にいとまがないほどの検証を経た結論が出つくした感がある。にもかかわらず、明らかにされていない点があることも事実である。例えば、亀田隆之氏の「氷上川継事件」^(二)で事例の処理について適用されるわが国養老律の処罰規定に女子がないことをその母法である唐律との対比することによって明らかにされているが、同じ養老律が適用されたと思われる長屋王事件について言及されることがないことなどは素朴な疑問の一つである。このことは処罰の問題以前のアプローチのし方において考えなければならない自尽を行った長屋王自身のこの問題に対する

対応の思考心情、及びそうさせた聖武天皇側の思考心情、についてのアプローチの必要を感じさせるものではないであろうか。

(一)

長屋王事件を原点に立ち返って考えると、この長屋王事件は自尽させたというのか、させたのは誰か、自尽したのは長屋王であることから、両当事者を中心として、その背景について意志決定をする条件として考えるべきではなからうか。

まず、『続日本紀』の当該条から見ていきたい。「令_レ王自_レ尽_一。」となり命令形となっているが、獄令7には、「五位以上及皇親、犯罪非_二惡逆以上_一。聽_レ自_二尽於家_一。」とあり令の規定では惡逆以上でない_二と家で自尽することはできないが、これが許可されたとするならば天皇や政府の許可があつたはずであると中西康裕氏はのべ、「令_二王自_レ尽_一。」を命令形としてとらえている_③。しかしこの条文には微妙なニュアンスがあり必ずしも一致した見解として定まっているわけではない。従来の解釈は次の三つに大別することができる。

- (1) 自尽が命ぜられたとする見解。前述中西康裕氏の他井上亘氏は「長屋王は「私学_二左道_一、欲_レ傾_二国家_一」という罪状で

自尽を命ぜられた」としている_④。

- (2) 自尽させたとする見解。例えば、中川收氏「長尾王の罪をその邸宅で糾問し、一二日に自尽させたが」とのべ、その内容については「自経したというより、自経させられたというのが実態であつた」としている_⑤。表現は若干異なるが東野治之氏も「謀反を計っているとして自殺させられる事件」があつたとするのもこの類型に入れることができよう_⑥。

- (3) 自尽したと表現されるもの。『日本靈異記』には「他の為に刑に殺されむよりは、自ら死なむには如かじとおもへり、即ち、其の子孫に毒薬を服せしめ、絞り死し畢りて後に、親王、薬を服して自害したまふ」とある_⑦。

上述の三つのカテゴリーに分ち、管見の限りに於てあてはめるところ、前後の解釈にかなりの差異があることがわかる。その原因の一つになったと考えられるテキストについても読み方に差異があることがわかる。朝日新聞社版六国史の『続日本紀』では「令_二王自_レ盡_一」と読み、吉備内親王以下については、「亦自_レ経_一」と読んで、後者については(注)として略記に「自念_下无_レ罪被_レ囚必_レ為_レ他刑不_レ如_二自害_一既服_二毒薬_一忽以_レ類死生年四十六」とあり、自尽を略記の記事を援用して解釈しているが、令してせしむとしてどこから命令されたかどうかにについては根拠を明らかに

していない。強いて云えば、略記の記事から自殺の意志の強いことを思わせるものと考えられる。

次に令との関係についてみる。獄令7にある五位以上および皇親が死刑に当たる罪を犯し、それが支配秩序をゆるがす諸罪悪、即ち、謀反・謀大逆・謀叛・惡逆・不道・大不敬・不孝・不睦・不義・内乱のうちの不睦と内乱を除いた「八虐のうち第四番目惡逆以上でない場合は家で自尽することが許される」という規定がある。長屋王の場合は第一の謀反であるから許されないことになるが、特にゆるされたものであろう」と補注されている^(五)。

また、「令^{シメ}王自^ラ盡^{シテ}、其^ノ室^ニ二品吉備内親王、男從四位下膳夫王、无位桑田王、葛木王、鈎取王等、同亦自^ラ經^ル、」の『続日本紀』の解釈についても微妙な受け取り方の違いがある。朝日新聞社版では注として、「自^ラ經^ル、原本經を經に作る」として縊死とし、その經とした根拠として天平宝字七年十月藤原朝臣弟貞傳に天平元年長屋王有^レ罪自盡其男從四位下膳夫王以下「皆經」としている^(六)。これに対して岩波版新日本古典文学大系『続日本紀』では、「王をして自^ラ盡^シなむ。その室^ニ二品吉備内親王、(中略)亦自^ラ經^ル。」とあつて注として自尽はみずから生命を絶つこととし、補注では先述したように、八虐の第四の惡逆以上でない場合は家で自尽することがゆるされるが、長屋王にかけられた嫌疑は

八虐の第一の謀反であるから自家での自尽はできないことになるが、「特にゆるされたものであろう」とした上で『日本靈異記』を引いて、「長屋王みずから刑殺されるよりは自殺したほうがよいと考えて、子^(ママ)・孫に毒藥をのませたうえで絞殺し、その後服毒自殺をしたという」として、この場合も命令があつたかどうかの判断は下していない^(七)。新訂増補国史大系『続日本紀』では「令^{シメ}王自^ラ盡^{シテ}其^ノ室^ニ二品吉備内親王(中略)同亦自^ラ經^ル。」とあり、『日本靈異記』でなく紀略を重視したことがわかる。三つのテキストではいずれも王を自盡させたというにとどまり、命令が出されたかどうかについては判断を下していない。ただ室及びその男については長屋王とは異り、自經させられた説はとらない。自らの意志が働いていたことの表現がなされているからである。

ここではこの問題はこれまでに止め、あとでまとめることにしたい。

(二)

長屋王事件の背景については、まず、皇位継承を前提に、当時権勢の座にあつた藤原鎌足の血を引く藤原不比等ら藤原一族がその勢力を温存するために、勢力を伸長してきていた長屋王の皇親

系統の皇位継承を阻止するための陰謀であつたとされる。皇親側の皇位継承の可能性が問題となつた発端は、文武天皇の二五才の早逝により首皇太子（後の聖武天皇）への勢力を温存したまま皇位継承の方法として、妃として不比等の女、光明子を送り込むとともに皇后に立てるといふ術策であつたといふ。^(二三)文武天皇後の皇位は首皇太子の成長をまつて文武天皇の母の元明天皇、つづいて文武天皇の同母姉の元正天皇が皇位についたことで、いわゆる女帝の時代が続いたことは周知のことである。長屋王事件と光明子との関係は立后以前に端を発する。すなわち、光明子十六才の靈龜二年と考えられる年に入内し、神龜元年首皇太子の即位とともに夫人の地位につき、神龜四年期待の皇子が誕生するが、期待の皇子を僅か一か月後には皇太子に立てることまではしたものの一ヶ年後の翌年神龜五年（七二八）突如天死するという不測の事態が起きたことと、更に皇太子の死んだ同じ年、聖武天皇の他のもう一人の夫人県犬養宿禰広刀自に安積親王が生まれたということが重なつた。当然のことながら安積親王立太子が政治問題となることが予想されるので、藤原氏はそのような不利な事態が生ずることに先手を打つため、従来の皇子立太子策を急に光明立后といふ直接策に切り換えたというのが岸俊男氏の考である。^(二四)しかし、この計画を実行するために大きな障害になることは大宝令の

規定に皇后は内親王たるべしとあることであり、光明子の立后に最も強く反対することが予想された人物が、皇親勢力の代表としての長屋王である。藤原氏が長屋王を誣告によつて排除するといふ陰謀は、背景として上述によると岸俊男氏は分析し、定説となつてきた。なお、長屋王が令の規定に従つて光明子立后問題に反対が予想される想定を裏付けるものとして、同じ不比等の女で文武天皇の皇后宮子の皇太后の称号問題について聖武天皇の勅、大夫人を長屋王が養老律令の公式令の条文から皇太夫人が正式と取り消させた事件のいきさつが明らかにされたが、長屋王事件を全体の流れとしてみる時、何が重要な点であるかを考えたい。

長屋王事件を、このようにいわば姻族として天皇家へはいり込んで自らの政治勢力を温存し、拡大を企図することで、四万点の木簡が物的証拠として物語るような権力者の長屋王家が一夜にして、ほとんど全員が自尽という形で滅亡することで説明ができるであろうか。そして、その直接の発端は、聖武天皇を中にはさんで、たとえ異母姉妹であつても嫁の光明子と妹の宮子の「皇太夫人」の称号の、聖武天皇の面子にかかわる取り消しにあるといえるだろうか。中川收氏の提起したことはこの点にあると考えられる。^(二五)筆者は指摘したことには同感であるが、なお、これよりも『日本靈異記』記載の次の事件に注目したい。以下にその概要を

抄出する。

天平元年（七二九）二月八日に平城京左京の元興寺で大法会を開き、三宝を供養した時のことである。太政大臣（誤りで正しくは左大臣）正二位の長屋親王（長屋王のこと以下同じ）が聖武天皇の勅をうけて多くの僧侶を招いて饗応をした時の事。一人の僧が不謹慎にも炊事場に入ってきて、椀を出してご飯をもらった。長屋親王がこれを見て象牙の笏で僧の頭を打った。頭から血が流れたので僧は血をぬぐい恨めしげに泣いてたちまちこともなく出て行った。法会に参加した多くの僧侶や人々はひそかに「何か不吉だ、何か起こるぞ」と云い合った。それから二日後長屋王をねたみそねむ人が天皇に讒言して「長屋親王は国家を倒し、帝位を奪おうとしている」と申し上げたところ、天皇は非常に立腹され、軍兵を差し向けて戦わせたので、親王は観念して、「罪もなく捕らえられる。捕らえられたら必ず殺されるだろう。他人の手で殺されるよりは、自殺した方がましだ」と覚悟を決め、子や孫たちに毒薬を飲ませ、絞殺した後、親王自身も毒薬を仰いで自殺された^{（二六）}。（以下略）というのである。これは『扶桑略記』神亀六年（七二九）二月六日の条にのせられ、また『元亨釈書』卷二二資治表はこの略記をもととしたのではないかといわれ、『今昔物語集』卷二〇、二七話もこの説話からとられている。この説話は

法会の期日も示されているし、あとの後略とした部分も続紀と一致するので、まず事実と考えてよからう。この説話でまず注目すべきは、続紀にもべられているように、怨霊となって葬られた土左国の人々に死人が多くでるなどの同情が長屋王に対してあるものの、頭を打ったことについては不謹慎な行動で、その原因が鉢を差し出した僧にあるにもかかわらず、身分の高い長屋王がやるべきではないという見方をしていることと共に、長屋王がなぜそのような笏で頭を打つにいたったのかについてのいきさつについて説明がどこにも出ていないということである。推測の域をでないが、そうさせたのは、この法会を勅した聖武天皇にあるのではないか。左大臣が直々に法会を行う責任者の長官に任ずること自体が尋常では考えられないことではないだろうか。もちろん當時にあつては周知の如く、前年の神亀五年（七二八）八月二日には「皇太子ノ寝病、經日ヲ不^レ愈、自^レハ非^三三宝^一威力ニ、何^ソ能^ク解脱^{（二七）}患苦ヲ、因^レ茲ニ敬^テ造^テ觀世音菩薩ノ像一百七十七軀、并經一百七十七卷ヲ、禮^シ佛^ヲ轉^メ經ヲ、一日行道^{（二八）}緣^ニ此功德ニ、欲^ス得^{（二九）}平復^{（三〇）}、（以下略）^{（三一）}」とあり、聖武天皇は皇太子の平復のみしか頭になかった。また、八月二三日には、「天皇御^{（三二）}東宮^{（三三）}、緣^{（三四）}太子ノ病^{（三五）}遣^{（三六）}使^{（三七）}奉^{（三八）}幣^{（三九）}於諸陵^{（四〇）}」とある。こうした中で、四日「太白經^{（四一）}天^{（四二）}」ことがあつて、翌九月一三日皇太子薨^{（四三）}ず、同

二九日には「夜流星^{アリ}長^サ可^ニバカリ、二丈余^一、光照赤^{ヨモト}四、断^一散^メ墮^ニ宮中^一」^(九)とあり、居ても立つてもいられない立場に置かれていたと考えられる。更に、一二月二八日には、「金光明經六十四帙六百四十卷^ヲ領^ニ於諸国^ニ、国別^ニ十卷、先^ニ是^{ヨリ}諸国所^ニ有^{スル}金光明經、或^ハ国^{ゴト}八卷、或^ハ国^{ゴト}四卷^{ナリ}、至^ニ是^ニ寫^シ備^テ領^下ス、隋^ニ經^ノ到^ル日^ニ即^ム令^ム轉^セ讀^セ、為^レ令^メ国家平安^{ナラ}也、」^(一〇)とあつて翌天平元年（七二九）を迎えるのである。ここで指摘して置きたいことは皇太子歿に関するすべてのことが仏教信仰によつて行つてゐることである。ここには聖武天皇がこの説話の法会を開くことと勅との關係を明らかにする史料はないが、いかなる心理状態にあつたかは想像に難くない。と同時に、これを勅、すなわち命令として受けた左大臣長屋王の心情も推察できる。それがこの『日本靈異記』の元興寺法会の事件を起こさせる背景と長屋王事件における聖武天皇と長屋王との關係が悪化する直接の端緒であつたと考えた。つまり、單なる感情の行き違い、称号の取り消し問題よりも背景を信仰の違いに求めるべきではないかと考えるのである。これに関連し次に聖武天皇の仏教信仰に関連する鷹飼禁止令について取り上げる。古代に於ては鷹は諸国から貢上され、天皇の「御覽」を経たのちに「御鷹飼」に分与される。「御鷹飼」は「宣旨をもつて任ぜられる特権的身分で、主鷹司、藏人所あるいは六衛

府に属する官人でもあつて、」一般の鷹養人の如く鷹の飼育に當つた。^(一一)聖武天皇神龜五年（七二八）八月甲午（甲子の誤で二九日）の詔では「朕有所^ニ思^フ、比日^ノ之間、不^レ欲^セ養^フ鷹^ヲ、天下^ニ之人^モ、亦宜^ク勿^レ養^フ、其待^ニ後勅^ヲ、乃須^レ養^フ之、如有^レ違者^{ニハ}、科^ニ違勅^ノ之罪^ヲ、布^ニ告^フ天下^ニ、咸^ニ令^メ聞^知セ^一」とある。鷹の飼育の禁止は養老五年（七二一）七月二五日にもなされたことがある。^(一二)その後復活されたらしく、神龜三年（七二六）八月八日に放鷹司の鷹戸一〇戸が定められていたものである。^(一三)本条の禁令は放生思想にかかわり、あるいは皇太子の病氣と關係あるか、と解されてゐるが、聖武天皇が特に、「思^フ所あり」^(一四)とあるように、この言葉^(一五)を聖武天皇が用いる場合は強い心情を表わす用例から考へて、皇太子の寝病からの平愈を祈るせつばまつた氣持から發していることは明白である。當時は貴族のたしなみとして鷹狩が健全なスポーツとしてなされていたが、この禁止令によつて養鷹と共に鷹狩も禁止されたものと考えられる。殺生を禁ずる放生思想は佛教の思想として風靡^ビしてゐたことは天武天皇四年（六七五）四月一七日の「檻^{オリ}箠^シをつくり機^{フム}槍^{ハナテ}の類を施して漁^サ獵^キを禁ずること、同四月朔より九月三〇日までの間比^ヒ満^マ沙^サ伎^キ理^リ梁^{リヤウ}を作つて牛馬犬狼鶏の食をとり食することを禁止する^(一六)ことなどにみられるように聖武天皇以前からあつたことは周知の通りであるが、また、天平二年

(七三〇) 九月二九日の詔を作つて禽獸を捕すること、哄籬を作つて猪・鹿を殺すことの禁止にみられるように聖武天皇が以前にも増して強く信じ、前述のような養鷹禁止令を詔して、皆に知らしめ、違反する者には違勅の罪を科す時まで徹底したことは前述の元興寺大法会事件の理解を容易にし、また長屋王事件の背景の前提をなすものであると考えたい。

(三)

文武天皇二年(六九八)八月一九日の「詔曰、藤原朝臣所賜之姓、宜令其子不比等承之、但意美麻呂等者、縁供神事、宜復舊姓焉、」とある。この詔との関係で注目すべきことは、これに先立つ文武二年三月九日の詔、即ち「筑前国宗形、出雲国意宇二郡司、宜聽連任三等已上親」とあり、さらにこの詔の翌日一〇日には、「任諸国郡司因テ詔、諸国司等銓擬郡司勿有偏党郡司居任、必須如法、自今以後不違越」とあるので、宗形・出雲の両社に対していかに格別の配慮がなされたかがわかる。この三等は三親等の意味であることは注記の通りで、一般の式部上の郡司任用と異っていることは注目すべきことである。

つまり、意美麻呂の復姓は神道に対する一種の保護政策の一つの表れとみなければならぬであろうが、当時の社会における意美麻呂の心情としては全盛の藤原氏一門からはずされたという意識はまぬがれないものがあつたろう。その意味では『続日本紀』をはじめとして姓を記さずにただ「意美麻呂」とのみ記すことの意味を推察できるのではないだろうか。復姓の詔の四ヶ月後の一二月に鑄銭司が設けられた時、意美麻呂がその長官に任ぜられ、慶雲二年(七〇五)四月には左大弁に任命され、一〇年後の和銅元年(七〇八)には神祇伯となり、最後は同四年(七一)四月閏六月中納言兼神祇伯で没している。

上田正昭氏によれば神祇官の長である神祇伯は「神祇祭祀・祝部・神部の名籍・鎮魂・御巫・卜兆・官事を惣判」した。また、「わが国の官制は、二官(太政官・神祇官)と太政官のものとの八省(中務省・式部省・治部省・民部省・兵部省・刑部省・大藏省・宮内省)で組織され、太政官に神祇官がならぶという形態であつたが、神祇官の実態は太政官より下位にあつて、官位令にあつても太政官は正一位・従一位相当、左右大臣は正二位・従二位相当、大納言は正三位勲一等相当とされているのに、神祇伯は従四位勲四等相当であり、事実八世紀の神祇伯は大納言・中納言各省の式部・兵部・宮内の卿(長官)を兼任したものが少くなく、神祇官と太政

官とはけつして対等の官ではなかった。^(三二)「文武天皇二年（六九八）八月一九日の詔で祭政分離が行われるようになったとしている。

なお、復姓に関しては上田正昭氏の祭政分離による律令行政組織の整理、と共に復姓は一種の復古主義であることは注目すべきことである。次にその事例をあげておきたい。磯部の例である。

磯部「祖父は豊受大神宮禰宜補任次第」に大神主祖父とみえ、大建冠奈波の男で庚午年籍で誤って石部姓となったが、和銅四年（七一）三月一六日の官符により、旧姓の神主に復したと伝えられている。「磯部は石部とも書き、この姓の者は各地に分布するが、伊勢国の磯部（石部）としては、皇太神宮儀式帳に多氣評の助督として磯部真夜乎がみえるほか、皇太神宮（内宮）に所属する種々の内人・物部に磯部姓の者があり、また止由気宮儀式帳に記す豊受宮（外宮）の種々の内人のなかにも石部姓の者がみえる」とある。^(三三)

磯部とは多氣川（今の祓川）の東側をイソの地と呼んでいたらしいが、イソベとは「古事記」の応神天皇の条の「この御世に海部・山部・山守部・伊勢部を定めたまひき」とあるが、そのイソベが伊勢部になったことが推測できる」という説がある。しかし、イソベは古代木簡に「五十戸」^(三四)があり、サトと読み、五十戸一里制の里と理解することができる。神道が古いしきたりを遵守

する風習によると考えるからである。^(三五)庚午年籍に起源することよりこの考えが妥当であると考えからである。

地名に関しては別に考えることにして、以上のことを総合すると、律令制官僚国家形成に向けての祭政分離の整備を大義名分とした仏教サイドの神道封じ込め政策と、今一つは藤原一族内部の不比等側の意美麻呂排除施策とが、復古主義的な流れを背景としてなされたと解釈したい。^(三六)

このことを意美麻呂はどう受け止めたであろうか。中臣氏の祖神天兒屋命はもともと忌部氏の高皇産靈神の子孫である天太玉命と共に天照大神の雨岩戸籠もりに際して天照大神の出現に功績があったことにより伊勢神宮の神嘗祭や臨時奉幣の時に勅使である王に従う神祇官使を代々勤仕するようになったと『古語拾遺』が伝えている。^(三七)大化改新及びその後の孝徳天皇の御代には中臣鎌足の活躍が顕著であったことから天智八年（六六九）一〇月鎌足の病が重くなった時、天皇が東宮太皇弟をつかわせて大織冠と藤原姓を賜った。鎌足の薨ずる前日のことである。天武一三年（六八四）一月朔、中臣連らの五二氏の朝臣の賜姓記事により、以降藤原朝臣を称するようになったとするのが通説となっている。従って文武二年（六九八）の意美麻呂は藤原意美麻呂から旧姓中臣意美麻呂へ復姓し、和銅四年（七一）六月中納言兼神祇

伯であることを考えると、神祇伯は神祇官の最高の位であり、官位相当制に従って中納言で従四位であったわけである。このことは意美麻呂に限らず中臣清麻呂の場合も同様であるから、文武二年（六九八）の当時の復姓の勅は意美麻呂にとっては叙位の将来の上限のストップを意味する一種の左遷であると受け止められたであろう。つまり、文武天皇の考えがどこまであったかは知るよしもないが、藤原氏一族が神道側をも支配の中に残したいとする不比等側の犠牲となった結果であると考えたい。

(四)

次に神道に関するものとして賀茂祭を取り上げる。周知のようにこの期には賀茂祭には次の五回の禁制関連の事項が出されている。

- ①『続日本紀』文武天皇二年（六九八）三月二日の条「禁_ス山背国賀茂祭ノ日会_レ衆騎射_一」^(三九)
- ②『続日本紀』文武天皇大宝二年（七〇二）四月三日の条「禁_ス祭賀茂神_一日、徒衆会集、執_レ仗騎射_上、唯当国之人不_レ在_二禁限_一」^(四〇)
- ③『続日本紀』元明天皇和銅四年（七一）四月二〇日の条「詔

ヲク、賀茂祭ノ日、自今以後、国司毎_レ年親臨_テ檢察_セ焉_一」^(四一)

- ④『本朝月令』「神龜三年（七二六）三月。家人会集。一切禁断_一」^(四二)

⑤『三代格』天平一〇年（七三八）四月二二日勅、比年以来、祭賀茂之神之日、会集人馬、悉皆禁断、自今以後、任意聴祭、但祭礼之庭勿令闘乱。

である。ほぼ同じ内容の禁制が『続日本紀』所引で一三年間に三度、と『本朝月令』で出されていることが知られることについて、これまでは賀茂祭の日に衆を含めて騎射することについての禁制であるとするには異論はないが、その趣旨とか具体的にどのような行動についてなされたかの理解には違いがみられる。岡田精司氏は、行基の一門の宗教活動が禁断の対象となったことを想起させるものがあるとし、神社祭祀が、「後世の祭祀にみる流鏑馬のような行事があつたのであろうか、それが律令国家にとってはお繰り返し禁令を發布せねばならぬほどの、不穏な反国家的な動きとして捉えられていたのであろう」としている。新日本古典文学大系『続日本紀』では、④の衆人が会集すること自体が禁止されたことと、『本朝月令』所引「秦氏本系帳」の欽明天皇の時代に風吹雨零の時、卜部伊吉若日子に卜わしめたところ、賀茂神の祟であるというので、四月吉日を選んで「馬繫_レ鈴、人蒙_二猪影_一」

而駢馳」を祭の際に行うようになったこと、⑤の『三代格』の但し書きの、鬪乱をしないことを条件に全面禁制解除をあげて「鬪乱の発生が騎射の禁止ないし制限の理由だったのであろう。」と^(四五)している。岡田氏は①②③をあげ、前述の如く不穏な反国家的な動きとは具体的に「行基の一門の宗教活動が禁断の対象となったことを想起させるものがある」とした上で山城国風土記にみられる賀茂祭創始説話は国司が臨察するようになってから神社側が云い出したこととすれば両者の関係が説明がつくのではないかと^(四六)している。

ここでの問題は以下の点である。第一はなぜ同じ内容の禁制が出されたのか、またその禁制が文武天皇の初期に集中しているのか。意美麻呂復姓（旧姓復帰）の（三）にみたように①の文武天皇二年と符合することでもわかるように復古主義の流れに沿うものであり、宗教面での神道に限らず、民政面での本貫主義と軌を一にするものと考えるが、ここではその指摘だけに止めたい。

第二は③の「親臨檢察」についてである。最初に指摘したいことは「親」は朝日新聞社版『続日本紀』では「親^{カウ}」と読み、新日本古典文学大系『続日本紀』では「親しく」と読んでいるが、^(四八)いずれにしても国司の檢察下に置かれること、つまり、管理が国司のもとに置かれることを意味するものと理解され、管理を国司

と明確にした一種の降格であり、神道への弾圧の一つの形であったと考えられよう。後者の点については④の禁制をみればわかるように、規制弾圧でなかったならば⑤の解除がなされなかったであろう。次に前者についてみていきたい。『本朝月令』には「令^三山背国^四賀茂神宮^五」、「神祇令云。天神地祇。神祇官皆依^六常典^七祭之。」とあり、つづいて、「義解云。天神謂伊勢。山城鴨住吉。出雲国造齋神等^(四九)。」とある。最後の文は、伊勢・住吉・出雲が、いわば賀茂社が国スケールで齋神を競った神社であった中から朝廷が伊勢神宮と同格となることへの規制、即ち降格措置であったと考えられる。その結果として国司の主催する「国祭」として定着するわけである。

もともと神道と天皇家との関係については云うまでもないが、この賀茂社との関係も例外ではない。賀茂社の創建について記した山城国風土記逸文によると、「正一位勲二等賀茂大神御社。賀茂者。日向曾之峯天降坐神賀茂建角身命也。神倭石寸比古之御前立上坐而宿^一坐大倭葛木山之峯^二。自彼漸遷。至^三山城国岡田之賀茂^四隨^五山代河^六下坐^七葛野河与^八賀茂河^九所^{一〇}会。（以下略）」とあるように、日向の天降り伝承をもつ記紀との関連が伝えられ、大和では神道―天皇家との関係が深いと考えられる葛木山との伝承をもつものである。このことに関して青木紀元氏は、「可茂社の神

は日向国曾の峰に天降りした賀茂建角身命であり、その神は神倭石余比古を先導して大和の葛木山（現御所市）に宿り、その地より山代国岡田の賀茂（現相楽郡賀茂町）に移り、更に木津川を北上し、賀茂川上流に至り、久我の国の北山基に鎮座した」とし、さらに、「この伝説から、賀茂氏は、大和葛木山の拠地から移住したもので奉斎する神は、賀茂建角身命であること」などを説明している。^(五)つまりこのことは、天皇家は云うに及ばず当時の識者の間では賀茂社は天皇家の信仰が背景にあることは周知のことであつたわけで、「会衆騎射」「徒衆会集執仗騎射」がなされるというのは禁ずる名目にすぎないと考えねばならない。現に騎射は宮中で行われている行事でもあるからである。

つまり、この問題は一つには神道側に対する会衆騎射の名を借りた仏教側の弾圧と、他の一つは、これに対する神道側の妥協的対応策である「国祭」への降格の二つの表れであると解さねばならないと考えたい。

(五)

次に『続日本紀』の元正天皇養老五年（七二二）一〇月一三日の条を取り上げたい。

「太上天皇召入^テ右大臣從二位長屋王、參議從三位藤原朝臣房前^ヲ詔^メ曰、朕聞^ク、万物ノ之生、靡^サ不^レ有^レ死、此^レ則天地ノ之理、奚^ム可^ニ哀悲^ニ、厚^シ葬^セ破^レ業^ヲ、重^シ服^ヲ傷^レ生^ヲ、朕甚^テ不^レ取^ラ焉、朕崩^セ之後、宜^シ於^ニ大和ノ国添上郡藏宝山北^{サホヤマ}雍良^{ヨラ}岑^{ミネ}造^テ龍^ヲ火葬^ニ、莫^ク致^ル他處^ニ、」^(五)

とある。この条は元明天皇のいわば遺言で、いくつかの注目すべきことが述べられているがここでは関係のある部分について取り上げたい。第一は召入れられた中に遺言でありながら首皇子（聖武天皇）が入っていないということである。左大臣不比等の没は養老四年八月三日であるからほぼ一年後のことであり、從二位右大臣の長屋王が最初に召入れられ、次に不比等の男房前が続いている。第二には不比等の跡をつぐべき武智麻呂が入らずに房前が入っていることである。第三には火葬にしてほしいと遺言していることである。この第一点でまず注目すべきは形式の上では元正天皇から皇太子の首皇子に譲位されることは既定の事実であるとはいうものの、文武天皇没後祖母の元明天皇につづいて伯母の元正天皇を年が若いという理由でおくれたこととの関連において考えねばならないが、この不連続性には他にも考えなければならぬように思われる。この点に関して野村忠夫氏は天平一六年（七四四）二月二四日に聖武天皇は紫香樂宮へ出発して行くが、

その留守官として難波宮に残った左大臣諸兄が二六日に難波を皇都とする旨の勅を宣しているが、このことについて「その背景に元正太上天皇の意向が推測されねばならない」として元正天皇と聖武天皇との間には聖武天皇―光明皇后―藤原南家（豊成・仲麻呂）と元正太上天皇―諸兄との系列の対立があったと考えている。^(五三) また、この対立関係は養老元年（七一七）三月三日老左大臣石上朝臣麻呂が七八才の生涯を終え、五九才の不比等が政権を確立すると、実質の後継者に嫡子武智麻呂（三八才、南家の祖）の身分を変えることなく、次男の房前（法的には庶子、三七才、北家の祖）を政治後継者に選んだ。つまり同年一〇月一日議政官が激減した現状をとらえ、兄の武智麻呂を差しおいて房前を「朝政に参議させた」とし、「その選択には、おそらく継室三千代との合議があり、また、元明太上天皇・元正女帝の了承があったと推測できる」とし、それは「今後も継続されるべき律令体制の貫徹という律令国家の使命と、首皇太子・安宿媛の前途安泰を期する役割とを実質的に房前に託そうとした」からであると、その後継者選択の意志が不比等にあったと述べている。^(五四) しかし、その背景の全容の総合はのちに述べるが、結論を先に述べれば、この遺言の展開が端的に示しているといえよう。即ち、元明太上天皇と武智麻呂はうまくいつておらず、その穴を埋める役割を内臣とし

ての房前が果たしており、女帝体制の当初において文武天皇、元明天皇が考えていたようにには首皇太子はならず、皇太后・太皇太后の意志を継承するものではなかったということでは止めたが、その関係を如実に示すものが元明太上天皇の遺言であったと考えたい。

第三の火葬の問題については本稿にとっては基本にかかわることである。というのはグローバルな文化の問題として長屋王事件の背景を考えると、日本の深層文化にかかわるからである。^(五五) 故ここでは火葬の問題を聖武天皇の場合をも含めて検討することにする。

『続日本紀』に従えば、この期の火葬記事は、六世紀前半の仏教公伝に関連して、従前の土葬に代わって火葬が普及したことが一般的理解としてなされている。即ち、『続日本紀』文武天皇四年（七〇〇）三月一〇日の「道照和尚物化」記事の中の遺教により火葬が行われたことが「天下火葬從_レ此而始_レ也」^(五六)とあって知られ、この記事により「かねてから道照を敬重していた持統・文武・元明・元正らに火葬を望ませ、朝廷の内外にこれが影響して俄かに火葬が盛行し始めた」とみられることは、あながち無理ではないと思われる」と受け取られ、これに反して道照を知らない聖武・光明に至って篤信の仏教徒でありながらも土葬に戻ったかの

ような葬儀が行われたことの理由づけを説明している。^(五七)

聖武天皇の場合は天平勝宝八年（七五六）五月二日五六才で崩御、同五月一九日の太上天皇佐保山陵に葬み奉るについて、本文注では聖武が没してから一四日目に一九日が当たることをあげると共に、「火葬のことは記されていないとした上で山陵で火葬された可能性はあるが確証はない」としているが、補注の火葬の項では前述の如く、持統・文武・元明・元正らの道照を知っている天皇には火葬を望ませ朝廷の内外に火葬が盛行する端緒を作ったが聖武・光明に至って土葬に戻ったのは道照を知らなかったからであると述べ、若干のニュアンスの違いを示している。^(五九)

元正天皇の場合は天平二〇年（七四八）四月二八日「太上天皇を佐保山陵に火葬している」がその時の山陵の位置は明瞭でないが、そこから天平勝宝二年（七五〇）一〇月に奈保山西陵に改葬されている。^(六〇)

元明太上天皇の場合は養老五年（七二二）二月七日平城宮中安殿で六一才で崩御している。同二三日大和国添上郡椎山陵に「不用喪儀^(六一)、由^(六二)遺詔^(六三)也」として葬っているが前述の遺言にもかかわらず火葬にしたという記事はどこにも見出せない。新日本古典文学大系本も同様である。^(六四)そこで注目しなければならぬのは同八日の御装束事への従二位長屋王、従三位の藤原朝臣武智

麻呂等、營陵事に大伴宿称旅人がそれぞれ任命されている記事である。不比等は既に前年の養老四年（七二〇）八月三日に薨じており、長屋王が実権の中心となっていること、火葬を遺言した元明天皇の遺言の場にいたこと、さらに遺言の趣旨を充分に理解し、これまでに検討したことでも明らかなように従来の神道方式が本来のあり方であることを信念として持っていたことが考えられること、などにより、自ら装束事となって火葬によらない百姓のための従来方式による薄葬の陣頭指揮をとったものと考えられる。

このように考えるにはいくつかの前提が必要である。第一は葬儀は特別の遺言があれば別であるが、逝去した被葬者の心よりも葬儀を行う者の心の方が重視されるということである。第二に葬儀にはそれを行う従来 of 伝統的仕来りが大きな意義をもつということである。元明太上天皇の場合は元正天皇と長屋王が第一に属すること、元正太上天皇の場合はそれ故聖武天皇が執行し火葬にしたと考へたい。前者の場合の遺言は天皇家という第二の条件のこともあつて遺言の精神が生かされて仏教の火葬方式が見送られたと解することができよう。後者の場合は第二の条件よりも葬儀を行う聖武天皇の意志が天皇家としての仕来りを上回ったということができると解せねばならないし、それほど聖武天皇の仏教

信仰はこれまでに述べてきたように批判を受けるほど深甚であったということができる。

(六)

天平勝宝八歳(七五六)五月一〇日小さい事件が『続日本紀』に記されている。「出雲国守從四位上大伴宿禰古慈斐、内豎淡海眞人三船、坐_下誹_三謗_シ朝廷_一无_ト礼_上、禁_二左右_ノ衛士府_一」^(六四)とある。内豎は「知比佐和良波」と注され、未冠の童を殿上の軀使に候せしむるを云とある。淡海眞人三船は中西康裕氏によれば、『続日本紀』の編纂に当たり、長屋王の誥告を主張し、光仁天皇の承諾を得て、贈位により復権を果たさせた人物で、天平勝宝八歳以降それまでの間に、宝龜二年(七七二)七月二三日正五位上で刑部大輔、同三年四月二〇日大学頭見任で文章博士兼任、同八年一月二五日大判事、同九年二月二三日文章博士で再び大学頭に任ぜられるので、当時にあつても天皇家の御養育係ではなかったろうか。淡海はわからないが大伴宿禰古慈斐は謀叛などの犯罪の嫌疑を受けた者がなされるように、左右衛士府に留置された。大伴宿禰古慈斐が解任か、土佐守への左遷か、流罪か、史料によって異なるが、いずれかの処罰を受けたことは明らかであ

る。古慈斐は祖父麻呂の子で、天平十一年(七三九)正月從五位下、同一四年(七四二)四月正五位下で河内守を経て、前述の出雲守になるが、天平宝字元年(七五七)七月橘奈良麻呂の変に坐し、土佐へ配流、宝龜元年(七七〇)十一月從四位上に復し、同六年從三位、同八年從三位で大和守となり、八三才で没している。淡海眞人三船については全く手がかりがないが、その後の昇進をみると処罰にはならなかったのではなからうか。いずれにしても其後間もなく天平宝字元年(七五七)七月大伴宿禰古慈斐は橘奈良麻呂の変に坐し、宝龜元年(七七〇)十一月本位の從四位上に復しはするが、任国である土佐に配流されるのである。^(六五)

この朝廷誹謗事件は奈良麻呂の変と関連をもつものと考えられるが、注目すべき点だけを結論として述べれば、左大臣橘朝臣諸兄の家司或は資人の祇承の人の佐味宮守が主人に当たる諸兄を、たとえ一年も前の酒の席のことであつたといえ宝字元年(七五七)一月二八日に太上天皇(聖武)に云つて諸兄を致仕(辞任)に追込んだということとは明示されてはいないが相通ずるものがあるように思われる。奈良麻呂の変の一コマに、勅使が奈良麻呂に逆謀の動機を問うたのに対して、内相(仲麻呂)の政が、「造_三東大寺_一、人民苦辛、氏々人等、亦是爲_レ憂_(六七)」と答えていることである。一般にこのことについては、勅使が寺を造ることは

元、汝が父の時より起れりと答えた。問答が鮮やかであったことにのみ関心が持たれ、古代のデイベートの手本とされてきていることであるが、前の朝廷誹謗事件と余りにも状況が合致することに気づくであろう。仏教一辺倒になっている状況、例えば、聖武太上天皇没後に詔して「分遣使工ヲ、檢催諸国ノ仏像ヲ。宜年来ノ忌日ニ必令造了。其仏殿兼使造り備。如有仏像并殿已造畢者、亦造塔令会忌日。」^(六八)ということに対する誹謗ではなかったろうか。それが小は朝廷誹謗事件となり、大は奈良麻呂事件となったと考えたい。また、その底流には鎌足―不比等から光明皇后に領導された聖武天皇に受継がれて東大寺及び大仏建造と国分寺及び国分尼寺でクライマックスを迎えるのである。

(七)

次に仏教に対する対応策と考えるものを取り上げることにする。元正天皇養老五年（七二二）五月五日の令には「令下七道、按察使、及太宰府、巡省諸寺、随便併合」とある。^(六九)いわゆる諸寺併合令である。この令が神道側の発想から発せられたと考えることは、発せられた五月五日が神道にもとづく菖蒲の節句の

日で、これに伴う儀式が行われる日に当たることが第一の根拠である。第二はこの令は元正天皇霊龜二年（七一六）五月一日の詔に発するものであることである。繁雑であるが全文を掲げることにする。

詔曰ク、崇飭法藏、肅敬爲本ト、營修佛廟、清淨爲先ト、今聞諸国ノ寺家、多ク不如法、或草堂如闕、爭求額題、幢幡僅施、即訴田畝、或房舍不修、馬牛群聚、門庭荒廢、荊棘弥生、遂使無上尊像永蒙塵穢、甚深法藏、不脱風雨、多歷年代、絶無構成、於事勸量、極乖崇敬、今故併兼数寺、合成一区、庶幾同力共造、更興類法、諸国司等、宜明告国師衆僧及檀越等、條録部内ノ寺家、可令并合財物、附使秦聞、又聞諸国ノ寺家、堂塔雖成、僧尼莫住、礼佛無聞、檀越子孫、惣攝田畝、専養妻子、不供衆僧、因作諍訟、誼擾国郡、自今以後、嚴加禁斷、其所有財物田園、並須国師衆僧及国司檀越等、相對檢校、分明案記、充用之日、共判出付、不得依旧檀越等專制、近江国ノ守從四位上藤原朝臣武智麻呂云、部内ノ諸寺、多割檀区、無不造修、虚上名籍、覲其如、此、更無異量、所、有田園、自欲専利、若不匡正、恐

ハ致^{サム}減^{セム}法^フ一、臣等商量^{スルニ}、人能弘^{ムトハ}道^{ミチ}、先哲^ノ格言^{ナリ}、闡^イ揚^ス佛法^ヲ、聖朝^ノ上願^{ナリ}、方^ニ今人情稍薄^ク、釋教陵遲^{セリ}、非^ニ独^リ近江^ノ一^ニ、余国^モ亦爾^シ、望^ム遍^ク下^ニ諸国^ニ、革^ス弊^ヲ還^シ淳^ニ、更^ニ張^テ弛綱^ヲ、仰^テ稱^ス聖願^ニ、許^レ之^ヲ、^(七〇)

この詔は通常三項目からなるといわれている。①寺院の合併を命ずる詔、②は寺院の財物等の管理方式を厳しくする詔、③は寺院をめぐる弊害の改革を求める武智麻呂の上奏、である。最初にあげた養老五年五月五日の令は靈龜二年五月一日の①のくり返して、いわば催促をなすもので、天平七年（七三五）六月己丑^五条で停廢が決定されたと解されている。しかし、この靈龜二年五月一日の詔は同時期に当たる元正天皇の靈龜二年（七一六）四月二〇日の国郡司への詔をみればわかるように入京大夫の衣服の破弊菜色が多いことをあげて職務の公帳をのけものとして声誉に身をやつし、欺謾をなすことを批判して、国司・郡司に職務を忠実に実行することを命じていることと対比して考えれば、根拠は推察の域を出ないが、直接的な神道の立場からの佛教に対する批判と解することができる。つまり国郡司に対すると同じ論理で寺院のあり方を批判したもので合併・併合は処罰であると考えなければならぬであろう。というのは任命した国司・郡司は官職であるから、「朕將何任」と処分することができるが寺院は、国分寺

及び国分尼寺を除いて、官職ではないから合併せよというのは一種の処分を意味するものと考えられるからである。従ってこの詔は佛教の立場からした単なる佛教興隆のための寺院財政の健全化対策としては理解することはできないと考えたい。従って神道の側からの考えと解するわけである。

次に③についてみることにしたい。この③の、①から③までの位置づけに関して、新日本古典文学大系『続日本紀』は「武智麻呂の上奏（３）（③の意、筆者注）が契機となつたとする」^(七〇)としている。ただここでこのことよりも先に疑問に感じることは、近江国守従四位上藤原武智麻呂の上奏文がこの詔に取り入れられて、この詔を出す契機になつたかどうかということである。最初に挙げるべき点は、武智麻呂が奏上して訴えたことは近江国の部内の諸寺の状況が、寺の土地を区画してはいるが寺の勤めを果たさず専ら自分の利益を得ることに専念しているのでは道理をわきまえという先哲の教えも、佛法を広めるといふ天皇の佛法興隆の願もあつたものではない。これは近江に限つたことではないので諸国に弊を改めるようにしてほしいというのであるが、問題はこの訴えと主文の詔とは余りにもかけはなれていることである。つまり、本気で仏法を勤めないなら、そんな寺は合併したらよい、その際の方法は国司側と寺院側の衆僧側とが立会えということが

のべられている。いわば武智麻呂の訴えを逆手にとった措置、即ち、正常な活動をしなかったことへの処罰がなされているとみることができる。

また、従四位上武智麻呂がなぜ近江国守であるかということである。新日本古典文学大系『続日本紀』は家伝下には「(和銅)五年三月徒爲『近江守』」とある。また、第三項の『臣等商量』と複数形なので、武智麻呂個人の奏ではなく、本来は近江国司奏であったか」と注してあるように、近江国からの上奏であっても武智麻呂の奏によったことの異例さにふれてはいる。しかし、根本的には官位相当制をとっている律令制下の当時にあつて従四位上の近江の国司はいくら藤原氏との関係が従前からあつたとしても、かけはなれた位階であり、武智麻呂の上奏があつたとしてもそれが詔の中の一部として入れられて、なおそれが全般的な詔の理由として重ねられていること自体が異常といわなければならぬ。

武智麻呂については、和銅四年(七一)四月七日に房前と共に従五位下から従五位上への昇叙がなされているが正四位上への叙任記事が『続日本紀』にはなく、前述の如く、和銅五年(七二)六月「徒爲『近江守』」と出ているのみであるについて新日本古典文学大系では「祖父の鎌足、父の不比等は淡海(近江)

国と関係が深く、子の仲麻呂も近江守となつている」と疑問点を指摘している。ここでは先にあげた元明天皇の遺言との関連、不比等の後継者選びとの関連もあるが、ここまでに止めたい。

(八)

八世紀初期の政治史は「皇親政治の時代」と呼ばれる。前世紀末の律令の制定の天武天皇の遺志をついだ持統女帝の受禪をうけて文武天皇は、一五才で即位し二五才でなくなるまでの僅か一年間の治世ではあつたが、刑部親王、つづいての穗積親王を知太政官事に任じ政治に当たつた時期であつた。若い藤原不比等も、当時の家格主義と大宝令の才幹德行採用主義の流れの中にあつて、生き方の目標を律令の実施定着に置かざるを得なかった。続く元明・元正の時代は、文武天皇がその遺児首皇太子(聖武天皇)の成長を待つて継承された祖母元明、伯母元正の二代の女帝の時代の、いわばつなぎの時代とつづくわけであるが、この時代はそれなるが故にいくつかの特色がある。その最大のもの、その後聖武天皇の時代との対比により明確に色分けできるように、背後の姻族としての皇后の領導のないことがあげられなければならない。このことは左大臣・右大臣をはじめとする太政官の意向が

そのまま天皇の意志に反映される時代でもあった。その直接的表れは、完成に近づいた律令制の展開される公地公民制下の農地農民対策の面に表れてくる。(一) 養老六年(七二二) 四月二五日の百万町歩開墾計画、翌養老七年(七二三) 四月一七日の三世一身の法、天平元年(七二九) 班田收授見直し、などである。ここで当面の神佛の信仰について注目すべきことは、歴代の天皇が政治を行う場合に神経質なまでに中国の儒教思想に判断をおおき、その上に立って神及び佛の双方に比較的公平に信仰をもっていたことは知られていることであるが、これはまたその両者の間でゆれ動いた時代であることも事実である。これは一つには律令国家が軌道に乗ったことで開発が進み、そのための用水不足に由来する雨乞ひをはじめとする五穀豊穡の祈願であり、今一つは災害から逃れるための祈願が第一に考えられ、第二には当時わが国が東アジアの国際舞台に仲間入りすることによってもち込まれた天然痘に代表されるような流行性疫病の平癒や長寿の祈願にあった。また、これを文武天皇から元明・元正天皇までの祈願・祈祷に限ってみれば、神道にもとづく神祇を中心として、その上に仏教の經典の書写・読経を加えるという形で祈祷・祈願が行われた時期に当たる。文武天皇の慶雲二年―三年(七〇五―七〇六)の場合を例示すれば次の如くである。⁽¹⁾

(1) 慶雲二年四月三日、「詔^シ曰、朕以^テ菲薄^ノ之躬^ヲ、託^ス于王公之上^ニ、不能^ハ下^ニ徳感^シ上天^ヲ、仁及^中黎庶^上、遂^ニ令^下陰陽錯謬^ニ、水旱失^レ時^ヲ、年穀不^レ登^ヲ、民多^中菜色^上、毎^レ念^フ於此^ニ、惻^シ怛^ニ於心^ニ、宜^ク令^下五大寺^ヲ讀^ミ金光明經^ヲ爲^レ救^フ民苦^ニ、(後略)

(2) 同六月二六日、奉^テ幣帛^ヲ于諸社^ニ以祈^フ雨^ヲ焉、

(3) 同六月二七日、太政官奏^ス此日亢旱^メ、田園焦卷^ス、雖^モ久零^ク祈^{スト}、未^ダ蒙^ラ嘉澍^ヲ、請^フ遣^シ京畿内淨行^ノ僧等^ヲ祈^ハ雨^ヲ、(後略)

(4) 同七月二九日、大倭国大^ニ風^フ、損^ニ壞^ス百姓^ノ廬舍^ニ、

(5) 同八月一日、詔^メ曰、陰陽失^レ度^ヲ、炎旱彌^レ旬^ヲ、百姓飢荒^メ、或陷^ル罪網^ニ、宜^ク大^ニ赦^メ天下^ニ、與^レ民更新^ス、(後略)

(6) 同九月九日、置^テ八咫鳥^ノ社^ヲ于大倭^ノ国宇太^ノ郡^ニ祭^ル之^ヲ、

(7) 同九月二六日、越前^ノ国献^ス赤鳥^ヲ、国司并出^ス瑞郡司等^ニ進^ニ位^一階^ヲ、(後略)

(8) 慶雲二年、是^ノ年、諸国二十飢疫^ス、並^ニ加^テ医薬^ヲ賑^ニ恤^ニ之^ヲ、

(9) 同三年閏正月五日、京畿及紀伊、因幡、參河、駿河等^ノ国並疫^ス、給^テ医薬^ヲ療^セ之^ヲ、是日、令^レ掃^ヒ淨^メ諸仏寺并^ニ神社^ヲ、(後略)

(10) 同正月一三日、奉^ル新羅^ノ調^ヲ於伊勢神宮及七道^ノ諸社^ニ、(後略)

(11) 同正月二〇日、勅令^ム禱^セ神祇^ニ、由^テ天^ノ下疫病^ニ也、

(12) 同正月二八日、泉内親王参^ス于伊勢^ノ大神宮^ニ、

(13) 同二月一六日、河内、攝津、出雲、安芸、紀伊、讃岐、伊

予七国飢^テ、並^ニ賑^ム恤^ム之^一、

(14) 同二月二六日、是^ノ日、甲斐、信濃、越中、但馬、土佐等^ノ国、一十九社^ヲ、始^テ入^ル新^{トシ}年^{コヒ}、弊帛^ノ例^ニ、其神名具
神祇官記

(15) 同四月二九日、河内、出雲、備前、安芸、淡路、讃岐、伊

予等国飢^テ、遣^メ使^ヲ賑^ム恤^ム之^一、

(16) 同五月一五日、河内、国石川、郡、人河辺朝臣乙麻呂献^ス白鳩

一^ヲ、(後略)

(17) 同六月癸酉朔、日有^レ蝕^{セル}之^一、

(18) 同六月四日、令^メ京畿^ヲ祈^フ雨^ヲ于名山大川^ニ、

(19) 同七月二四日、丹波、但馬、二国^ノ山^ニ灾^{アリ}、遣^メ使^ヲ奉^テ幣帛^ヲ

于神祇^ニ、即雷声忽^ニ応^メ、不^メ撲^ク自滅^ス、大倭^ノ国宇智^ノ郡狹

嶺^ニ火^{アリ}、撲^チ滅^ケ之^一、

(20) 同七月一八日、周防国守從七位下引田^ノ朝臣秋庭等献^ス白鹿

一^ヲ、諸国飢^テ、遣^メ使^ヲ於六道^ニ、除^ハ西^ノ海^ニ道^ニ並^ニ賑^ム恤^ム之^一、大宰府言^ス、

所部九国三嶋亢旱大風^{アリ}、拔^キ樹^ヲ損^レ稼^ヲ、遣^メ使^ヲ巡省^セ、

因^テ免^ヌ被^ル灾^ヲ尤^モ甚^ニ者^ニハ調役^ヲ、

(21) 同八月三日、越前^ノ国言^ス、山灾不^レ止^マ、遣^メ使^ヲ奉^リ幣帛^ヲ内神^ニ救^フ恤^ム之^一、

(22) 同八月二九日、遣^メ三品田形^ノ内親王^ニ、侍^ニ于伊勢大神

宮^ニ、

(23) 同二月辛未朔、日有^レ蝕^{セル}之^一、

(24) 同二月六日、遣^メ四品多紀^ノ内親王^ニ、参^シ于伊勢大神宮

一^ニ、

(25) 慶雲三年、是年、天下^ノ諸国疫疾^ス、百姓多^ク死^ス、始^テ作^テ土

牛^ヲ大^ニ饑^ス、

この時代の天皇の政治姿勢は基本的には天命思想にもとづいて

いる。天命思想について関晃氏は次のように述べている。(七三)中国か

らの律令制度の導入に伴い律令政治思想の具体的な表れとして祥

瑞制度も取り入れられた。祥瑞というのは、天子の徳が高く、政

治がよく行われていると天(天帝・上帝・昊天上帝)がこれに感

応して亀・龍などの珍しい動物や植物・天然現象を出現させるが、

この祥瑞と表裏に、悪政に対する天の警告が災異であるとする思

想で、わが国では中国の制度を殆んどそのままの形で採用、実施

されたといわれている。ただ、中国では祥瑞を出現させる天が唯

一絶対的な存在としてあるが、わが国では多神教的なものに変貌

し、天皇ばかりでなく天神、地祇や先皇の霊ばかりでなく、天照大神の意志までも加えられるようになったととらえている。従って、この時代の天皇は祥瑞と災異に一喜一憂し、明け暮れしていた。慶雲の元号もその表れであるが、(1)の文武天皇の詔はまさにその天皇の心情を表したものととらえたい。ただ、その結果である水旱による年穀不登による民苦を除くための施策が、五大寺に金光明經を読むという仏という仏教的な要素が加わっていることである。(2)は諸社への弊帛による雨乞い祈祷で、天命への対応がゆれ動いたことを示す具体的な歴史事実を示すものである。(3)の場合は、何に対して「久々祈」ったか明示していないが、恐らく昭和二〇年代まで行われていた高い山上で火を焚く雨乞い行事に近いものが行われたものであつたらう。特定の神社へ祈祷が行われたのではないであらう。(3)の場合と殆んど同じような水旱に対する記事が『日本書紀』皇極天皇元年(六四二)七月二五日条にある。

群臣相語之曰、隨^{カミ}村々ノ祝部^ノ所教^ヲ、或ハ殺^ス牛馬^ヲ祭^{イフ}諸社^ノ神^ヲ、或ハ頻^ニ移^シ市^ヲ、或ハ^ハ河伯^ノ、既^ニ無^シ所効^ヲ、蘇我^ノ大臣報^ヲ曰^ク、可^シ下^ニ於^テ寺々^ニ、^{ヨミ}転^レ讀^ム大乘經典^ヲ、悔^ム過^ヲ如^ニ仏^ノ所說^ヲ敬^テ而祈^{コハム}雨^ヲ、^(七四)

これは、(1)(2)から(3)の淨行僧に祈雨をなすに至った

いきさつを示すものと考えて、ほぼ大きな誤はなからう。ただ、慶雲二年の場合は六〇余年の年数を経過しているので、現在の神主に相当すると思われる「村々の祝部」が牛馬を生贄としての祈雨は慶雲二年には行われていなかったと考えるのが妥当ではなからうか。これら三つの祈雨の方法はいずれも中国にあったものであるが、殺牛馬祭はわが国の在来的な神道による祈雨を継承したと考えられるが、市移祭と河伯祭、特に前者は中国のやり方をそのまま輸入した可能性が強い。(3)の記事は在来宗教である神道の系統の祝部によって行つた祈雨が所効がなかったという理由で仏教の説経による祈雨へかえられていくことと、それが蘇我入鹿の指示でなされたことを示している。

以下祥瑞と祈祷を項目毎についてみれば次のようになる。

項目 掲載記事の番号

- ①祥瑞 (7) 赤鳥・(16) 白鳩・(20) 白鹿
- ②弊帛 (2)・(14)・(19)・(21)
- ③伊勢神へ内親王派遣 (12)・(22)・(24)
- ④疫に医・薬給付(含加療) (8)・(9)・(11)(祈祷のみ)・(15)(賑恤)・(25)(土牛・儼)

なお、④の土牛というのは、土牛・童子等像を大寒の前夜半に陽明・待賢の二門には青色、美福・朱雀の二門には赤色、談

天・藻壁の二門には白色、安嘉・偉鑑の二門には黒色、郁芳・皇嘉・殷富・達智の四門には黄色のものを立て、年中の病氣をはらう大儺という行事が慶雲三年（七〇六）から始めて行われるようになった。大儺という行事が土牛・土偶人を宮域諸門に立てたのに対して、内裏の中で一二月晦日の戌刻に中務省が定めた親王及び大臣以下次侍従以上の儺人と中務省の官人が承明門外の東庭に参集し、儺人は東の宣陽門、南の承明門、西の陰明門、北の玄暉門の四門に分れて待機する。亥一刻に、大舍人に任せられた方相を先頭に親王以下の儺人陰陽寮官人が、紫宸殿前庭に参集し、儺人になった方相が眼の四つある黄金色の仮面をかぶり、黒い衣と朱の裳を着て、戈を右手に、楯を左手に、紺の布衣に朱の抹額を着し、紺の布衣、朱の抹額を着た偲子（小儺ともいう）と呼ばれるもの二〇人を従えて入ってくる。陰陽師の斎郎が庭の中で食薦を敷きその上に祭物を並べ、陰陽師が進み出て祭文を読み、続いて方相が儺声で三度戈で楯を打つのを合図に親王以下の儺人が桃弓・葦矢・桃杖で悪鬼を四門の外へ逐い払うという行事である。前者の土牛に類したものは平城、平安の宮城に代えた畿内版とも称すべきものがあり、また現在でも集落の境を示すことと兼ねた小祠を入口の峠に祠っていることに当たるものである。後者の儺は同じ疫病払いの行事である節分の豆まき行事のおにやらいに残

されている。

次に天文現象を取り上げることとする。天文現象は視覚によってはじめて意義が生まれ、それにまつわる吉凶を信じてこそはじめて歴史上に意義を残すものとなる。それ故、現実の生活に直接的に関係する旱天・霖雨・地震・疫病などとは全く異なった歴史上の記録である。それ故、その知識をもつ者、日本で云えば天皇をはじめとする皇親、貴族層が敏感であり、その知識の源のニューズソースに関係が深い者ほど去就が注目されるのは当然である。その点で亀田隆之氏が取り上げ分析した「神龜五年九月六日格」は極めて鋭い問題視角であると云わなければならない。^(七〇)また、最初にのべたように、心の問題としてみる場合に、神・仏の二つの面では前者即ち神道がより強く結びついていると考えなければならぬ。なぜなら、第一に星と結びつく信仰の占星術は呪術と深い関係にあり、日本では神道の系統がこれを伝承してきたからである。第二に律令制以降は僧尼令が神仏の住み分けに影響を及ぼし、占星・呪術を、研究を含めて僧尼の分野から禁止したからである。僧尼令を掲げる。

僧尼令 第七

1 凡僧尼。上觀「玄象」。仮説「災祥」。語及「国家」。妖惑百姓。并習「読兵書」。殺人奸盜。及詐称「得聖道」。並依「法律」。付

「官司」科罪。

2 凡僧尼。卜「相吉凶」。及小道巫術療^レ病者。皆還俗。其依「仏法」。

「持^レ咒救^レ疾。不^レ在^二禁限^一」。

即ち、僧尼令1では、「上^{かむ}づかた玄象を觀ること、百姓^ニ人が觀察する天文現象の星の運行の知識を學んで、災異や祥瑞で天皇の政治の善惡を論議すること、換言すれば天命思想を學ぶこと自体が僧尼の場合は法律違反に当たると定めている。僧尼にあつては、戦争についての書物を學ぶこと、一般犯罪は当然であるが、特異なことは結婚が奸に含まれ罪に問われることである。同2では龜卜や風水思想による占い、占筮術や厭符（まじない）による占いを禁じ、仏法持咒以外の呪術的行為による療病を行うことも禁じている。ここでこのような最新の科学や最新の思想の日本への攝取は留学生・留学僧及び帰化人によつてなされたことである。従つて彼等は聖俗どちらの道を選ぶかの問題があり、また時の政府が彼等の知識をいかにして利用するかの問題があつた。関晃氏はそのために行われた還俗を取り上げ、それが持統朝から元明朝にかけて顕著にみられるとしている^(七七)。このことは元正天皇及び長屋王の変を考へる場合に重要な点である。つまり、神道の分野で神祇令10で「凡天皇即位。惣^ニ祭^三天神地祇^一」が象徵するように、仏教との住み分けが行われて、天皇・皇親は星の運行や呪術

の知識・研究と親近關係にあり、仏教の僧尼とは一種の対立關係に置かれていたわけである。それ故還俗は、自らの意志によつて罪になることからまぬがれることもでき、また、還俗という手続きをふませることによつて爲政者が僧尼籍にある者を利用することもできる抜け道でもあつたわけである。和銅七年（七十四）三月一〇日条にみえる沙門義法の還俗に際しては大津連意毗登の姓と名を以て、從五位下が授けられたが、その目的が占術を用いんがためとしている^(七七)。

例として取り出した慶雲二年、三年の天文關係では、①（17）慶雲三年六月一日の日蝕及び②（23）の同三年二月一日の日蝕の二回であるが、それぞれユリウス暦の七〇六年七月一日と七〇七年一月九日に当たるが、いずれも藤原京では日蝕は生じなかつたとされているし、それ以上これと特に關連する事も記載されていないのでここでは取り上げないことにしたいが後者の日蝕に關連しては、この年に藤原京以外でもみられるので（25）にあるように諸国が疫病により百姓^ニ人々が多く死んだという事が原因の土牛を作つて儺祭が始まつたと考へるならば、（24）の二月六日の多紀内親王を伊勢大神宮に遣したのもこれと關連があるものとも考へられる。なぜなら、この疫の流行は翌年慶雲四年二月六日の大祓を行つたことも關連し、ひいては二月一九日の遷

都が議されたことともなったと考えられるからである。

次に天命災異思想と関連して続日本紀に記載されている星象と地震について文武天皇から長屋王の変までを取り出せば次の表の

天文地震記事表

| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ⑮ | ⑯ | ⑰ | ⑱ | ⑲ | ⑳ | ㉑ |
|------|-----------------------------------|----------|----------|---------|----------|-----------------------------------|------------------------------------|-----------------------------------|----------|---------|----------|---------|---------|----------|---------|----------|---------|---------|---------|----------|
| 文武 | | | | 大宝 | 慶雲 | | | | | 元明 | 和銅 | | | | | | | | | 靈龜 |
| 年月日 | 2. 7. 1 | 2. 11. 1 | 3. 11. 1 | 2. 9. 1 | 2. 12. 6 | 元 2. 1 | 元 5. 10 | 3. 6. 1 | 3. 12. 1 | 4. 6. 1 | 4. 12. 1 | 元 11. 1 | 2. 4. 1 | 2. 10. 1 | 3. 4. 1 | 3. 10. 1 | 4. 4. 1 | 4. 9. 1 | 6. 2. 1 | 7. 2. 25 |
| 現象記事 | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 〃 | 〃 | 〃 | 星昼見 | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 西樓 ^ノ 上慶雲見 ^{ハル} | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------------------------|---------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|---------|---------------------------------------|-------------------|-----------------------------------|---------|---------|--------|---|--|-----------------------------------|--|--------------------|----------------------------------|--|-----------------|----------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|--------|---|
| ㉒ | ㉓ | ㉔ | ㉕ | ㉖ | ㉗ | ㉘ | ㉙ | ㉚ | ㉛ | ㉜ | ㉝ | ㉞ | ㉟ | ㊱ | ㊲ | ㊳ | ㊴ | ㊵ | ㊶ | ㊷ | ㊸ | ㊹ | ㊺ | ㊻ | ㊼ | ㊽ | ㊾ | ㊿ |
| | 元正 | 〃 | 〃 | 養老 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 |
| 元 7. 1 | 元 12. 1 | 2. 11. 1 | 元 11. 1 | 2. 5. 1 | 2. 11. 1 | 2. 11. 1 | 2. 11. 1 | 3. 3. 26 | 4. 正 11 | 4. 正 17 | 4. 正 11 | 4. 正 1 | 5. 正 24 | 5. 正 25 | 5. 正 7 | 5. 2. 15 | 5. 2. 16 | 6. 3. 1 | 6. 7. 3 | 6. 7. 10 | 6. 7. 28 | 7. 9. 7 | * 7. 9. 7 | 7. 11. 27 | 元 4. 18 | 〃 7. 1 | 〃 7. 1 | 〃 7. 1 |
| 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 〃 | 是日、白虹南北 ^ニ 竟 ^ル 天 | 災惑逆行 ^ス | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 地震 | 亦地震 | 地震 | 大蔵 大蔵省倉、自鳴 ^テ 有 ^レ 声。 | 日暈如 ^ニ 自虹 ^ノ 貫 ^テ 暈南北有 ^レ 珥、因 ^テ 召 ^ス 見 ^メ 左右、大弁及八省、卿等 ^ヲ 於殿 ^ノ 前 ^ニ | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 有 ^ニ 客星 ^一 、見 ^ル 閣道 ^ノ 辺 ^ニ 、凡五日 | 太白晝見 ^{ハル} | 太白犯 ^ス 歳星 ^一 | 災惑入 ^ニ 太微左執法 ^ノ 中 ^ニ | * 新日本文学大系本 9月9日 | 夜月犯 ^ス 房星 ^一 | 月犯 ^ス 災惑 ^一 | 日有 ^レ 蝕 ^{セル} 之 | 災惑逆行 | 有 ^レ 星孛 ^ニ 于華蓋 ^一 |

| | | | |
|----|----|-----------|--|
| 47 | 〃 | 2. 2. 3 | 夜月犯 ^レ 填星 ^一 |
| 48 | 〃 | 2. 6. 22 | 太白書見 |
| 49 | 〃 | 2. 10. 29 | 昼、太白与 ^レ 歳星 ^一 、芒角相合 [、] |
| 50 | 〃 | 2. 12. 1 | 日有 ^レ 蝕之 ^一 |
| 51 | 〃 | 3. 12. 12 | 太白犯 ^レ 填星 ^一 |
| 52 | 〃 | 4. 1. 22 | 夜月犯 ^レ 心大星 ^一 |
| 53 | 〃 | 4. 3. 25 | 熒惑入 ^レ 東井 [、] 西亭門 ^一 |
| 54 | 〃 | 4. 5. 1 | 日有 ^レ 蝕之 ^一 |
| 55 | 〃 | 5. 4. 1 | 日有 ^レ 蝕之 ^一 |
| 56 | 〃 | 5. 5. 20 | 太白書見 |
| 57 | 〃 | 5. 8. 4 | 太白經 ^レ 天 [、] |
| 58 | 〃 | 5. 9. 29 | 夜流星 ^{アリ} 長 ^サ 可 ^バ カリ ^ニ 一丈余 [、] 光照赤 ^レ 四 [、] 斷 ^{シテ} 散 ^{ラセ} 墜 ^ニ 宮中 ^一 |
| 59 | 〃 | 5. 11. 1 | 雷 |
| | 天平 | 元 2. 10 | 左京人、漆部造君足、中臣宮処連東人密告 |
| | 〃 | 元 2. 12 | 長屋王自尽 |

ようになる。ここで明白に指摘できることはこの時代の知覚としては、星象では日蝕とそれ以外とは異なり、その画期は養老からであるということである。これは東野治之氏が指摘した「祥瑞の種類及び進献の時日が、養老前後から固定する。」^(八)と関連し、わが国への暦法の伝来・導入とも関係をもつものと考えられる。

星象の場合はその事実を簡潔に記載しただけで、多くの場合はそれがどのように当時の爲政者や百姓に人々に受け止められたかの記載はないのが通常であり、そのためにこそ歴史的意義づけの

意味があると考えたい。特に日蝕の場合は「日有^レ蝕^{セル}之^一」にすぎないのでこの養老元年十一月一日の日蝕、同二年五月一日の日蝕と続き、さらに同一月一二日の「彗星守^レ月」と続いている点を取り上げる。その一日後に「始^チ差^メ畿内ノ兵士^ヲ、守^{セシム}宮城^ヲ」となっている。^(八)このことについては養老三年(七一九)一〇月一七日の詔を根拠として舍人・新田部両親王をめぐる皇嗣に関する政界上層部の不安に対処するために、畿外の国々から徴発されていた宮城の守衛に当る衛門府・左右衛士府の衛士を補充するものとして畿内兵士が動員された記事としているが、彗星守月の記事、畿内兵士を新に宮城の守衛の兵士に加えた記事の直後の一二月七日の詔の、いわば皇位四周年総括として、「雑言^ニハ大赦^ト、唯該^ニ小罪^ヲ、八虐^ハ不^レ霑[、]朕恭^{シク}奉^ル爲^ニ太上天皇^ノ、思^フ降^ト非常^ノ之^ヲ澤^ニ、可^レ大^ニ赦^ス天下^ニ、(中略)僧尼亦同^シ、布^コ告^メ天下^ニ、知^シ朕^ノ意^ヲ焉[、]」^(八)とある。

これは元正天皇の養老元年(七一一)九月一日からの一連の美濃国への行幸において一二日には近江に於て山陰・山陽・南海の諸道の国司を行在所に詣させて土風歌舞を奏させ、また、一七日には東海道・東山・北陸の諸道の風俗雑伎を奏させて女帝の威信を示し、唯一の気がかりの行基の行動については神・仏の住み分け理論をもとに僧尼令違反を僧綱に令してやめさせることで道

を見出して、意気陽々とした元正天皇が、二度の日蝕は気にしなかったものの、災星と伝えられる彗星が現れたことに對して心の不安にかられて行つた措置ではなかつたらうか。最後の「僧尼亦……朕か意を知らしめよ」と云つたのは、行基をはじめとする対仏教政策の成功を誇示したものであらう。

元正天皇の心はやがて不安にかられることになる。そのはじめりは②⑧の養老四年（七二〇）一月一日の「是日、白虹南北竟^{ワタル}天^ニ」につづいて同一七日の「熒惑逆行^メ」の後の二月二十九日の隼人反殺^ニ大偶国守陽侯史麻呂^{（八四）}」と云うことであり、八月三日には一日から病についていた不比等の死を迎えることであつた。更に同じようなパターンで、養老四年九月一日の日蝕の後の九月二八日に「蝦夷反乱メ殺^サ按察使正五位上上毛野朝臣広人^{（八五）}」と云う事件が起つたことである。③①の養老五年（七二一）の一月二四・二五日の地震に際しては直後の二七日に詔し、風雨、雷震時の危機対策として臣子のとるべき道として「至公無私」と文武の庶僚に忠正の志を命じている。また、医卜、方術の優遇措置がとられて地震に對する対策は災異思想に基づいてはいるが、対策としては冷静な対応がなされている。これが天命災異思想によることは③②の同年二月七日の地震につづいて③③の「大藏省、倉、自鳴^テ有^レ声^{（八六）}」の二月一五日、及び翌一六日の「日暈^{カサキリ} 如^シ白虹^{（八七）}」

貫^ニ、暈^ノ南北有^レ珥、因^テ召^メ見^メ左右ノ大弁及八省ノ卿等^ヲ於殿ノ前^ニ」なされた次の詔が元正天皇の心情を示している。即ち、

朕德菲薄^ニ、導^ク民^ヲ不^レ明^{（八八）}、夙興以求^メ、夜寢以思^メ、身居^ニ紫宮^ニ、心在^ニ黔首^ニ、無^レ委^ニ卿等^ニ、何化^ニ天下^ニ、国家之事、有^レ益^ニ萬機^ニ、必^ズ可^シ奏聞^{（八九）}、如有^レ不^レ納、重^テ爲^ニ極諫^{（九〇）}、汝無^レ面從^ニ退^ニ有^ニ後言^{（九一）}、

更に翌一七日には重ねて、去年の咎徴が屢現れた。水旱による秋稼不登、平民流没して国家騒然として皆が苦勞し、遂に不比等が薨逝し「朕心衰慟^シ、今亦去年災異之余、延^キ及^ニ今歲^{（九二）}、亦猶風雲氣色、有^レ違^{（九三）}于常^ニ、心恐懼^{（九四）}、日夜不^レ休、然聞^ニ之^{（九五）}之旧典^ニ、王者ノ政令不^レ便^{（九六）}、事^ニ天地謹責^{（九七）}、以示^{（九八）}咎徴^{（九九）}、或^ハ有^ニ不善^{（一〇〇）}、所致^ニ之^{（一〇一）}異^{（一〇二）}乎、（以下略）

とのべ、天の咎が元正天皇の身にふりかかつたとわが身をせめている。天命災異と元正天皇に受け止められた星象はその後も③③③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩と続く。③⑦③⑧の太白の中③⑨の歳星（木星）も不吉といわれ、③⑨は災星の熒惑、④①の房星は蠍座の星で、四星からなり、天の驕つまり車駕とみなされ、この房星が月を犯すということは、月を元正とすれば、その讓位と解されたかといわれている。房星の月を犯すをどう受け取ったかは想定であるとしても、神龜元年（七二四）二月四日に元正天皇が讓位したことは史実であるので、

これまでに見てきた心情の推移を考えるならば、この想定は妥当であると考えたい。

次に聖武天皇についてみていきたい。聖武天皇はすでに(2)でも述べたように篤信の仏教信者であり、神龜五年(七二八)八月甲午(子の誤で朔に当たるか)養鷹禁止令を出したことは周知のところである。聖武天皇には待望の皇太子が神龜四年(七二七)九月二十九日に誕生するが、誕生日を迎える前に病床につくことになる。神龜五年(七二八)八月二日の勅に皇太子の平愈のために三宝のおかげで患苦を解脱したいから觀世音菩薩像一七七軀、經一七七卷を造って転読し、行道を行って利益に預かりたいと勅したことは既に(二)でもふれたところである。二日後には東宮御所へ異例の見舞に行き、また、諸陵へ幣帛を行ってゐる。これらのことは長屋王の変を考える時の前段階を示すものであるが、その前提について指摘して置かねばならないことがある。第一は聖武天皇は既に養老三(七一九)四月一〇日には首皇子として始めて朝政を聴いている。大宝元年(七〇一)の生まれであるから一九才であり、それ以来は元正天皇の治世について知っているはずであり、首皇子の立太子、元服の和銅七年(七二四)六月にまで遡る可能性もある。当然星象をはじめとする天命思想に関する知識は学んでいたものと考えられる。第二

には祈願の方式については既に述べたように、それぞれ神・仏によつて住み分けが行われ、それに神祇令・僧尼令、特に後者が大きな役割を果たしているが、これを受け止める心としても異なっているということである。即ち、神道では崇るという罰があり、仏教ではそれは現世利益といわれていても明示されず、すべては死後の世界に持ち越されていることである。このことは神道、仏教双方の対応に微妙な違いを生じていることも考えねばならないことである。

神龜元年(七二四)二月四日讓位を受けた以降の聖武天皇には星象は恵まれない。^④神龜元年(七二四)四月一八日の癸惑(火星)、^{④②}同七月一日の日蝕は奈良では生じなかつたといわれているものの、^{④③}養老四年一月一七日に現れた癸惑の逆行が同六月一日より九月二〇日までみられて、養老四年の癸惑逆行が観測された約四〇日後の二月二九日の「隼人反殺^ニ大偶国守陽侯史麻呂^ニ」の災星を改めて想起させた。なおこの対応関係は同年八月三日の不比等の死が続き、同九月一日の「日蝕が九月二八日の蝦夷反乱メ殺^ニ按察使正五位上上毛野朝臣広人^ニ」との再現により、より強く印象づけたに違いない。

ここで、これまでみてきたことをふまえて元正天皇と聖武天皇との星象観をみておきたい。^{④⑥}養老六年(七二二)七月三日「有

「客星」^ニ、見^レ「閭道」^ニ、辺^ニ凡五日、「が北斗七星が廻転する範囲内に彗星か新星かは明らかでない客星が入ることが不吉とされていることを受けたものであらうと考えられるが、四日後の同七日の元正天皇の詔として、

陰陽錯謬^メ 災旱頻^リ 臻^レ、由^テ是^ニ奉^ニ弊^シ名山^ニ、奠^ニ祭^ス神祇^ニ、甘雨未^ダ降^ラ、黎元失^セ業^ヲ、朕^ガ之薄德^{、致^ニ于此^ニ歟、百姓何罪^{アリ}、^ノ焦萎^{スル}甚^{シキ}矣、宜^ク大^ニ赦^シ天下^ニ、^{（後略）}と勅している。}

これに対して聖武天皇は神龜二年（七二五）六月二日^{④⑥}「太白晝見^ル」を受けて同九月二日の詔として、

朕聞^ク、古先哲王、君^ニ臨^ニ寰宇^ニ、順^ヒ兩儀^ニ以^テ亭毒^シ、叶^テ四序^ニ、而^レ齊成^ス、陰陽和^テ而風雨節^{アリ}、灾害除^テ以^テ休徵臻^ル、故^ニ能^ク騰茂飛英^{、稱^ニ百^ト、朕以^テ寡薄^ヲ、嗣^ニ膺^ニ景圖^ニ、戰々兢々^ト、夕^ニ惕若^ト厲^ミ、懼^レ一物^モ之失^{ハム}所^ヲ、嗟^ニ懷生^ノ之便安^ヲ、教命不明^{ナラ}、至誠無^レ感^{ズル}、天示^ニ星異^ニ、地顯^ス動震^ニ、仰^テ惟^ニ灾眚^ヲ、責深在^レ予^ニ、昔殷宗修^メ德消^シ雉^ノ之冤^ヲ、宋景行^レ仁^ヲ、弭^ニ災惑^之異^ヲ、遙^ニ瞻^ニ前軌^ニ、寧^ニ忘^ニ誠惶^ヲ、宜^ク令^ニ所司^ヲ三千人出家入道^{セシメ}、并左右京、及大倭国、部内諸寺、始^メ今月廿三日^一一七日^一転経^セ上^ニ、憑^ニ此冥福^ニ、冀^ク除^ニ災異^ヲ焉^{（ハハ）}}

ここでまず指摘したいことは、元正・聖武天皇ともに中国の儒教に基礎を置く天命災異思想を根底にしていることが、元正天皇については「朕が薄徳」となり、聖武天皇は「朕が寡薄」とか「責深在^レ予」で知られる。星象と爲政者の天皇との関係では聖武天皇の場合が最も明白である。即ち、景図に嗣ぎ膺り戦々兢々として日夜勤めているのに天は何を命じているのかはつきりさせないし、こちらの誠意を感じることなく天星異を示し、地震を以てする。中国の殷の高宗は徳のために予兆が収まり、宋の景公は熒惑の凶兆を止めさせたのにすべてこうあるのは自分の責かと受け止めて三千人の出家をさせ今月二三日より一七の經典の転読をして災異を除いてもらいたいと勅している。これは元正天皇の災異はすべて政治を行う者の政治の適・不適で百姓の責任ではないから刑罰を含めて点検しその反省に立つて大赦を行うということ、祈願は陰陽錯謬災旱頻りに臻る対策には神道方式の名山への奉幣による神祇奠祭にまずは頼り、効果がなければ百姓への対応を指示している。つまり、仏教では教命不明とする考え方が基本にあるから、爲政者である天皇自らが直裁を行う行動が生まれるのである。なぜなら前述のように仏は崇や罰を現世では下さないからである。

松本卓哉氏は当時にあつては『延喜式』陰陽式により、「天体

運行の觀察を担当する天文博士から密奏があつた^(八九)とされるが、このような機能をもった陰陽寮が令には規定されていたであろうし、またその故にこそ和銅七年（七一四）三月一〇日の占術・陰陽学・詩文の専門の沙門義法が位階・賜姓をもつて還俗させられたわけである。従つて聖武天皇は星象についても逐一奏上されており、その中にはそれぞれの星象についての故事も含まれていたであろう。その中では聖武天皇の最も懸念したのが熒惑であり、前掲の中国の故事もその故であつたと解さねばならない。その熒惑は⑤神龜四年（七二七）三月二五日「入^ニ東井^ノ西亭門^ニ」に現れ、ついで⑥同五月一日には日蝕があり、再び⑦翌五年（七二八）四月一日日蝕が現れた後⑧同年五月二〇日「太白晝見^ル」となる。太白は金星のことであるが、国の乱れる凶兆と云われ、甘氏星占では「太白昼見、天子有^レ喪、天下更^レ王大乱、是謂^ニ經天^一、有^レ亡^レ國、百姓皆流亡^ル」とある。⑨同八月四日には再び「太白經^ル天^ヲ」と続き、これを裏付けるように同八月二一日には「皇太子寢病、經^レ日不^レ愈」の経過の後同九月一三日薨することになる。聖武天皇の悪い予感^ハは⑩の同九月二九日の「夜流星^{アリ}、長^サ可^ニ二丈餘^一、光照赤^シ四^ノ、斷散^{シテ}墮^ニ宮中^一」そして⑪の雷までも一二月の異常な時期になり、つけ加わる。それを象徴するかのように同二月七日元明太上天皇が崩御することで聖武天皇は不安の極地に達

して神龜五年を閉じるのである。ここで考えなければならぬことはこのような星象にみられる凶兆は文武天皇以降長屋王事件までの三二年間の中この時期に集中していることである。例えば恐れられている熒惑は五例とも養老四年（七二〇）以降に、太白も養老六年（七二二）以降に集中している。その理由は明らかでないし、また明らかにし難いが、特に指摘したいことは、このような凶兆は聖武天皇とともに長屋王にも受け取られたであろうということである。

結びにかえて

長屋王は高市皇子の第一子であり、正室吉備内親王は草壁皇子女で、母が元明天皇である。この間に膳夫王、葛木王、鉤取王と円方女王をもうけ、不比等の女某との間に安宿王、黄文王、山背王、教勝をもうけている。その他にも長屋王邸出土木簡から幾人かの名が知られている。この中特に吉備内親王との間にもうけられた子の名前をみると、葛木という地名が、伝承などを通じて國家神道と関係が深いことは先に述べた通りであるが、膳夫も神璽の保管を意味すると思われるものであり長屋王がどういう心情で、何を望んでいるかをさぐることはできないのではないだろう

か。その一方で、聖武天皇は篤信の仏教徒で、仏式による朝廷の儀式の初七日の初七・二七・三七を取り入れ、勅して「太上天皇は出家して仏に帰したまふ」と云わしめたり、太上天皇の葬り奉るさまは、「御葬の儀、仏に奉るが如し」といわれるほどであったために（六）で述べたように些細なことから東大寺や国分寺、国分尼寺に反対する奈良麻呂の変にまで拡大することになる事件を起こさせたと考えたい。特に聖武天皇は一念直行の天皇であることもあって両者が最初に衝突したのが元興寺法会事件であった。在来宗教としての国家神道と渡来宗教としての仏教の国教化の間で揺れ動く社会の中にあつて、一念直行の聖武天皇が陰謀に乗せられて自尽を命じた結果長屋王は日本古来の仕来りから自尽の道を選び、吉備内親王は夫長屋王に殉じて自尽、長屋王の子らもこれに従ったということではなからうか。従つて文武天皇から孝謙天皇までに至る歴代天皇とこの国家神道と国教化を指向する仏教の動きは、それぞれプロセスの過程に於て、背景として意義をもっていると意義づけられなければならない。その過程が意味麻呂の藤原氏一族内部での序列化に伴う復姓であったり、賀茂神社への弾圧による降格であつたものと考えられるが、一方では神道側での退廃的な仏教への反撃もみられることとなつたと考えられる。社寺併合令はその明白な史実ではなからうか。このような、

いわば在来宗教と渡来宗教の間に置かれたのが、どちらかといえば天皇家寄りの文武・元明・元正天皇であり、天皇家として最もこれから遠い存在として篤信の仏教信者の聖武天皇があつたと考えられる。その点では長屋王事件は政治権力の争いとみることができない、深い、古い思想と新しい思想との争いで、それが従来の在来思想の長屋王に、現世に於ては力による必罰主義しかないという考え方の聖武天皇が、一念直行の性格をもっていたことも相まつて自尽を命じた。長屋王はそれが日本在来の生き方であると観念して、それに従つたといえるのではないであらうか。また、その間に共通してそう決断させたものは双方とも知識・文化を共有していた占星の信仰であつたと考えたい。

註

- (一) 新日本古典文学大系『続日本紀』二・一九九〇 岩波書店
補注10—30 五三三—五三四頁
- (二) 亀田隆之 水上川継事件に関する一考察 人文論究 四一
—三 一九九一 亀田隆之『奈良時代の政治と制度』再録
二〇〇一 吉川弘文館 一七五—一七六頁
- (三) 中西康裕『続日本紀』と長屋王事件 続日本紀研究
三〇〇号 三三三頁

(四) 井上亘『日本古代の天皇と祭儀』一九九八 吉川弘文館
八九頁

榮原永遠男「長屋王の変」の項『日本史大事典』五卷
一九九三 三七一頁

(五) 中川収 長屋王の変をめぐる諸問題 林陸朗・鈴木靖編『日本古代の国家と祭儀』一九九六 雄山閣出版KK 四九頁

(六) 東野治之『続日本紀』と木簡 新日本古典文学大系『続日本紀』月報3 岩波書店 二頁

(七) 日本古典文学大系『日本霊異記』

(八) 佐伯有義編 増補六国史 卷参(続日本紀 卷上 一九四〇朝日新聞社 一〇八一—一〇九頁

(九) 前掲書(二) 卷二 補注10—131

(一〇) 前掲書(八) 卷上 二二三頁注「王自尽」の項で、『略記』に自念「元罪被」因必為「他刑不_レ如_二自害_一即服_二毒藥_一忽以類死」とあり、略記の記載を根拠として自殺を行うに至った心の動きと、自殺の手段が服毒であることを注していることは注目すべきことである。

(一一) 日本古典文学全集6『日本霊異記』一四四—一四六頁
己が高徳を恃み賤形の沙弥を刑ちて、以て現に悪死を得し縁
第一 一九七五 初版 一九五五 小学館

(一二) 新訂増補 国史大系『続日本紀』前篇 一一九〇〇
吉川弘文館 一二五頁

(一三) 岸俊男 光明立后の史的意義—古代における皇后の地位— ヒストリア 二〇号

(一四) 前掲(二三) 二二頁

(一五) 中川収 長屋王の変をめぐる諸問題 (二) 大夫人称号事件 三五—四二頁 林陸朗・鈴木靖編『日本古代の国家と祭儀』一九九六 雄山閣出版

(一六) 前掲書(二二) 一四四—一四六頁

(一七) 前掲書(八) 卷上 二二〇頁

(一八) 前掲書(八) 卷上 二二一頁

(一九) 前掲書(八) 卷上 二二一頁

(二〇) 前掲書(八) 卷上 二二一頁

(二一) 弓野正武 古代養鷹史の一側面『律令制と古代社会』
竹内理三先生喜寿記念刊行会 一九八四 東京堂出版

一三〇—一五〇頁

(二二) 前掲書(八) 卷上 二二〇頁

(二三) 前掲書(八) 卷上 一六二頁

(二四) 前掲書(八) 卷上 一九七頁

(二五) 前掲書(二) 卷二 一九八頁

(二六) 佐伯有義編 増補六国史 巻巻 日本書紀 巻上

一九四〇 朝日新聞社 二七一頁

(二七) 前掲書(二六) 巻上 二二八―二二九頁

(二八) 前掲書(八) 巻上 七頁

(二九) 前掲書(八) 巻上 五頁

(三〇) 前掲書(八) 巻上 五頁

(三一) 上田正昭『論究古代史と東アジア』一九九八 岩波書店

八八頁

(三二) 前掲書(三一) 八四頁

(三三) 前掲書(一) 第一巻 補注5―二四 四一―四二頁

(三四) 『日本古代木簡集成』木簡学会編 二〇〇〇 東京大学

出版会 三八頁

(三五) 神郡・神戸にその例をみることで、戸の遺制が残るが、このことは改めて取上げることにする。

(三六) これまでの意美麻呂に関する代表的な解釈は野村忠夫氏のように、伴造が品部を率いて朝廷の職務を世襲的に分掌してきた負名の氏と呼ばれる氏が、律令官制に吸収された典型的なケースと理解している。

野村忠夫『奈良朝の政治と藤原氏』一九九五 吉川弘

文館 一二頁

(三七) 青木紀元監修・中村幸弘・遠藤和夫『古語拾遺を読む』

二〇〇四 右文書院

(三八) 前掲書(八) 巻上 五頁

(三九) 前掲書(八) 巻上 三八頁

(四〇) 前掲書(八) 巻上 八一頁

(四一) 群書類従 第六輯 訂正三版 一九六〇 続群書類従完

成会 二七〇頁

(四二) 新訂増補国史大系『三代格』

吉川弘文館

(四三) 岡田精司 奈良時代の賀茂神社 岡田精司編『古代祭祀

の歴史と文学』一九九七 塙書房 二五二頁

(四四) 前掲書(四二) 二六九頁

(四五) 前掲書(一) 第一巻 補注1―六二 二六一頁

(四六) 前掲書(四二) 二五一―二五四頁

(四七) 前掲書(八) 巻上 八一頁

(四八) 前掲書(一) 巻第一 一六七頁

(四九) 前掲書(四二) 二七〇頁

(五〇) 前掲書(四二) 二六八―二六九頁

(五一) 前掲書(三七)

(五二) 前掲書(八) 巻上 一六三頁

(五三) 野村忠夫『奈良朝の政治と藤原氏』一九九五 吉川弘文

館 六一頁・八九頁

(五四) 前掲書(五三) 二五頁

(五五) グローバルな立場から火葬と関係の深い生贄について次の拙稿の試論があるので参照されたい。

①拙稿 ケルト民族と日本民族との類同性に関する一考察―イ

キニエをめぐる予察― 二〇〇三 高松大学紀要 第三九号

②拙稿 生贄の系譜的類型―アステカの生贄を中心として―

二〇〇四 高松大学紀要 第四二号

(五六) 前掲書(八) 巻上 一三頁

(五七) 前掲書(二) 巻第一 補注1―一三一 二八六頁

なお火葬に関しては考古学の分野からなされた左の文献からは示唆されるところが大きい。特に網干氏の火葬普及の要因として経費節減に求める指摘は充分に首肯させるものがあると考えたい。

①網干善教 日本上代の火葬に関する二、三の問題 史泉

五三

②尾崎喜左雄 古墳から見た宗教観 斉藤忠編『日本考古学

論集 3 『呪法と祭祀・信仰』一九八六 吉川弘文館

(五八) 前掲書(二) 3 本文注 一六〇頁

(五九) 前掲書(二) 第一巻 補注 1―一三一 二八六頁

(六〇) 前掲書(八) 巻上 火葬 三五四頁 改葬 三五五頁

(六一) 前掲書 巻上 一六四頁

(六二) 前掲書(八) 二 本文 一〇五頁 補注 1―一三一

二八六頁

(六三) 前掲(五七) の②尾崎喜左雄論文が示唆的である。

(六四) 前掲書(八) 五〇四―五〇五頁

(六五) 中西康裕『続日本紀』と長屋王事件 続日本紀研究

三〇〇号

(六六) 前掲書(二) 補注19―一三三 では「大伴宿禰古慈斐・淡

海真人三船の不敬事件」で概要が述べられている。五〇九頁

(六七) 前掲書(八) 天平宝字元年七月四日(庚戌)の条

四二五頁 なおこの奈良麻呂の変の概要については前掲書

(二) の補注20―二二「奈良麻呂の変」参照 五一七頁

(六八) 前掲書(八) 天平勝宝八歳六月二二日の条 四〇七―

四〇八頁

(六九) 前掲書(八) 一五九頁

(七〇) 前掲書(八) 巻上 一一九―一二〇頁

(七二) 前掲書(二) 二 本文 一一頁 注二六

(七二) 前掲書(八) 巻上より引用

(七三) 関晃 律令国家と天命思想 日本文化研究所報告 第

一三集

(七四) 佐伯有義編 増補六国史 第二巻 日本書紀 巻下

一九四〇 朝日新聞社 一五二頁

(七五) 前掲書(八) 巻上 五三頁 前掲書(二) 補注 3―

七七(土牛・土偶人) 同3―七八(儼) 参照

(七六) 亀田隆之 神亀五年九月六日格の考察 人文論究 四五

―四 一九九六 亀田隆之『奈良時代の政治と制度』再録

二〇〇一 吉川弘文館 二〇八―二二七頁

(七七) 日本思想大系 律令 一九七六 岩波書店 二一八―

二三三頁

(七八) 関晃 遣新羅使の文化史的意義 山梨大学学芸学部研究

報告 六

(七九) 前掲書(八) 巻上 一〇一頁

(八〇) 前掲書(二) 一〇八頁

(八一) 東野治之 飛鳥奈良朝の祥瑞災異思想 日本歴史

二五九号 一九六頁

(八二) 前掲書(八) 巻上 一三七頁

(八三) 前掲書巻上 一三七頁

(八四) 前掲書巻上 一四七頁

(八五) 前掲書 巻上 一五二頁

(八六) 前掲書 巻上 一五七頁

(八七) 前掲書(八) 巻上 一七一―一七二頁

(八八) 前掲書(八) 巻上 一九三頁

(八九) 松本卓哉 律令国家における災異思想―その政治批判の

要素の分析 黛弘道編『古代王権と祭儀』一九九〇 吉川

弘文館